

スローライフ・フォーラム in 綾部実行委員会御中

**「スローライフ・フォーラム in 綾部」
— 報 告 書 —**

特定非営利活動法人スローライフ・ジャパン

1 概要

- ・開催日：2023年5月20日（土）・21日（日）
- ・場所：「京都府中丹文化会館」、「綾部市中央公民館」、ほか綾部市市街
- ・主催：スローライフ・フォーラム in 綾部実行委員会
- ・協賛：日本テレネット株式会社、シン・エナジー株式会社、ゲンゼ株式会社
- ・協力：NPO スローライフ・ジャパン、スローライフ学会、プラスツーリスト株式会社
- ・参加者：のべ約 550 人
（視察・交流会 70 人+パネルディスカッション 480 人）
- ・助成：公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー
- ・目的：田園回帰志向が高まる中、豊かな自然・歴史・伝統・文化など、地域の魅力を再発見するため、あらためてゆったりとしたライフスタイルを楽しむ“スローライフ”について考える「スローライフ・フォーラム in 綾部」を開催することを目的とする。
- ・内容：
 - <5月20日（土）>
 - 市内見学
 - 「夜なべ談義」（交流会）
 - <5月21日（日）>
 - 分科会
 - オープニングセレモニー
 - 基調講演
 - 分科会発表
 - パネルディスカッション

※敬称略・内容要約

2 内容

<2023年5月20日(土)>

(1) 市内見学

- ・ 移動手段：中型バス2台
- ・ 参加者：スローライフ学会関係者50人
- ・ 説明者：あやべ水源の里連絡協議 西田昌一会長、佐々木幸雄 同副会長、山崎善也市長、定住交流部朝子直樹部長、定住・地域政策課潮見雅敏課長
- ・ コース・時間：13:00~16:30
綾部駅から、「ゲンゼスクエア」(綾部バラ園、あやべ特産館、ゲンゼ記念館)、水源の里集落(老富シャガ群生地、栃餅ぜんざい試食など)



(2) 夜なべ談義 (交流会)

- ・ 会場：料理旅館「亀甲家」
- ・ 参加者：スローライフ学会関係者と地元関係者合計 68 人
- ・ 会費：5500 円
- ・ 参加者からのスピーチや、綾部の料理旅館文化の紹介など
- ・ 時間：18：00～20：30



<2023年5月21日（日）>

(1) 分科会

- ・会場：綾部市中央公民館（3会場）
- ・参加者：合計83名（スローライフ学会関係、一般公募による参加者他）
- ・時間：9：30～11：30
- ・分科会ごとに、アドバイザーが冒頭、自論を発言、参加者全員が自己紹介、活動紹介をしながら、各々の意見や提案を述べた。（※アドバイザーの意見はこの後の、分科会発表に。ここでは参加者などの発言抜粋を記す）



・第1分科会：テーマ「食と農を大切に」（地域の食べ物、農的暮らし、生きものとしての人間、半農半Xなどを語る）
アドバイザー：塩見直紀（半農半X研究所代表）、野口智子（NPO スローライフ・ジャパン副理事長）。合計32名参加

- ・スローライフという言葉がようやく定着してきた。
- ・海辺のまちおこしをやっているが、女性たちの元気に頼っても限界がある。
- ・「身土不二」という言葉にあるように、その土地の食べ物にこだわるのが大事。地域の顔がある。
- ・果物産地で生産するだけでなく、果物をテーマに住民が小さな催しを自ら考え実行している。
- ・ただ農産物を作るだけでなく、ソフトを考えよう。
- ・「シャガ」の花がなくて心配したが、他所の人達は喜んでくれた。そういうことを大事に。
- ・農業の現場は皆、高齢化で現実は大変。跡継ぎもいない。カッコいいことばかり言っていられない。
- ・米粉でシュークリームなどいろいろなものを作る。もっとそういうことの普及を。



- ・ NPO で農的活動をしている。竹で箸を作るワークショップなどで大人の男性が喜んだりする。そういう活動もできる。
- ・ 農村の当たり前のことが、見せ方や発信の仕方でも魅力になる。いいまちはそういうことが出来るまちだ。
- ・ 「半農半 X」をまねて、当地では「半デザイン半 X」を呼び掛けた。各地からデザインに興味がある人が集まっている。
- ・ その土地ならではの在来種の種にこだわる活動もある。そういうことに興味を持つ時代だ。
- ・ 農業をしている方だけでなく、いろいろな人が混ざってネットワークを作っていくと。
- ・ 心地よさや良い体験を、農産物として考えていけばいい。これからの観光はそういうことだ。
- ・ 体験を通して話した、触れ合った、人が忘れられない存在になる。
- ・ ベランダ菜園や貸農園、そんな小さな「農」でも考え方が変わる。いきなり新規就農でもない。
- ・ 農山村には尊敬できる人達がたくさんいる。一流の田舎になればいい。



・ 第2分科会：テーマ「小さい力を活かす」（集落、コミュニティ、自分事としての地域おこし、新しいエネルギー、水源の里などを語る）

アドバイザー：小田切徳美（明治大学教授）、齊藤睦（地域総合研究所所長）。参加者 27 名参加

- ・ 「水源の里」の活動で、少しは人の役に立つことをやっていると思う。
- ・ 地元があまり活性化に興味がない。地元に関係する人を取り組むようになった。
- ・ テレビに出たところは注目された。地区によって成熟度が違う。
- ・ Iターン者と接して、気づくことがあった。何もなかったことが好きと言われた。



- ・久しぶりに〇〇ちゃんと呼び合える場ができると嬉しい。
- ・綾部のネジの会社も有名。小さくてもしっかり繋ぐ「ネジ」をキーワードに動きを起こしている。
- ・綾部の人はこの土地のすごさを知っているが、その知識を更新できていない。
- ・活動すればするほど、荷物が全部自分に来るのがつらい。
- ・老富でぜんざいを出してくれた女性たちは立派な起業家だ。
- ・地元の木で、小さくてもエネルギーを作ったらどうだろう。
- ・大変小さな集落だが、地元、行政、ボランティアの三身の力で頑張っている。
- ・同じ絹産業でも、ここの影響力のもとには“マインド”があると感じた。
- ・子ども達が相談できる場、関係をどう作るか。
- ・過疎ではなく、適当なちょうどいい過疎で「適疎」と呼んでいる。
- ・東京は関係なく田舎同士が繋がる「互産互消」を。同じく情報交流をと思う。
- ・都会の便利に近づくことが活性化と思ったが、違うということを知った。
- ・地域づくりをやらねばならぬ、という強迫概念があるが、その根っこに人生がなくては。
- ・時間は将来への投資。課題を先に出すと、疲れてしまう。主体を形成するのに時間をかけること。
- ・町と村の差ではなく、「むらむら格差」が出てきている。
- ・どうやってきたのか、どう乗り越えてきたのかの「プロセス事例集」が必要。



・第3分科会：テーマ「多様に生きる」(自由な居場所、多様な営み、様々な生業、ワーケーション、移住などを語る) アドバイザー：筒井一伸(鳥取大学教授)、坪井ゆづる(朝日新聞論説委員) 24名参加。

- ・高齢化で辞めていく商売が多いが、業を継ぐという意味の「継業」なら成り立つ。
- ・東京では家賃、物の購入、娯楽にお金を使う。お金的には田舎の方が豊か。
- ・東京近郊は住宅だけで楽しい場所ではない。田舎の方が自己実現できる。
- ・シニアと子どもが一緒に何かやると学べる。繋



がりをもっと作ろう。

- ・企業もボランティアをすすめている。賃金が支払われないのが悩み。
 - ・派遣で食べている。安定はないが、自分的なライフスタイルができる。
 - ・年三回通った地方が気に入り、勝手に親子留学した。外から考えるより地域に入ると中は多様だ。
 - ・大学で教えていたころ、多様でいいと言うと学生は驚いた。
 - ・二地域居住している。綾部はいろんな世代に出会える。気づきがある。
 - ・大学出てからずっと一つの会社、職業。多様からは自分は遠い。
 - ・子どもが社会と繋がりたいくてもLINEはだめ、先生を通してとなる。
 - ・今の若者は目的をあたえてあげないとダメ。承認欲求がある。
 - ・許容するには折り合いをつけていくことが必要。
 - ・他で、地域で拒否された。地元の人と結婚したら溶けこめた。と聞く。
 - ・SNSの知り合いはいても、友達は減っている。
 - ・多様性は許容しなくてはいけないのか。年配者がまず多様性を持たないと。
 - ・マルチワークの人が増えている。また、民間から公務員になる人も。
 - ・公務員が副業をもって稼いでいけないのはおかしい。「半官半X」に。
 - ・子どもが減ると、部活ができない、子どもに多様性が育たない。
- ・このほかに、午後からの登壇者など7人が3分科会を移動しながら聞き入った。この分科会内容は、パネルディスカッション前に、分科会発表として報告され、ディスカッションのなかに反映されるものとなった。



(2) 昼食休憩

- ・会場：綾部市中央公民館
- 話し合いの続きをしながら地元のお弁当をいただいた。

(3) 開会



- ・会場：京府中丹文化会館（以下同様）
- ・時間：12：00 開場、13：00 開会
- ・参加者：480 人（以下同様。綾部市民、一般市民、自治体職員、スローライフ学会関係）
- ・司会：株式会社エフエムあやべ・真下加奈子、スローライフ掛川・長谷川八重（以下同様）



・オープニングセレモニー

太鼓披露「あやべ太鼓保存会」の皆さん

歓迎の言葉 山崎善也（スローライフ・フォーラム in 綾部実行委員会委員長、綾部市長）

来賓あいさつ 西脇隆俊（京都府知事）



(4

) 基調講演

時間：13：30 から 14：10

テーマ：「人間賛歌」

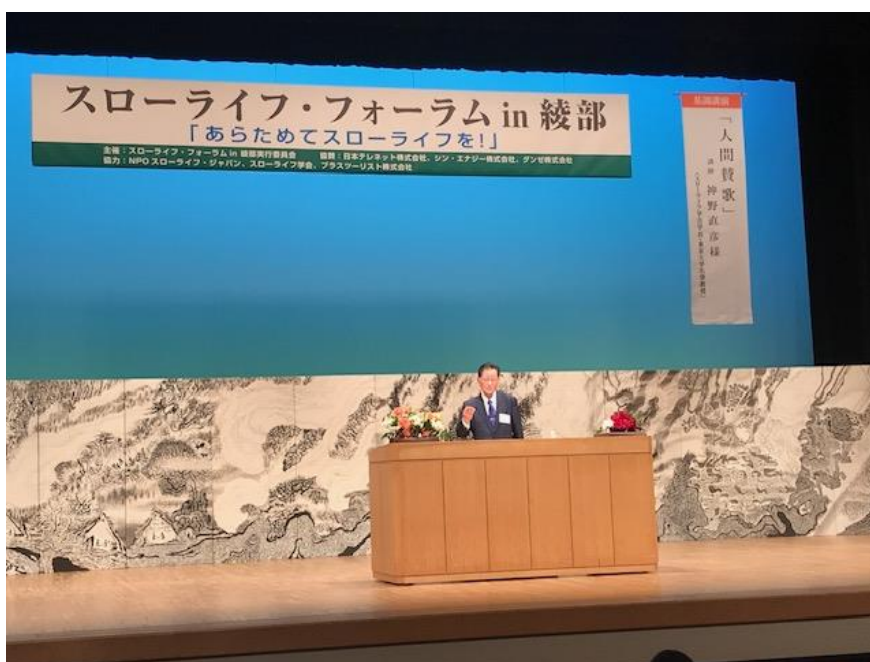
講演者：神野直彦（スローライフ学会学長、東京大学名誉教授）

私の人間観は

ひとつは、人間は存在しているだけで、素晴らしい価値があるということだ。「生」は偶然だが、「死」は必然である。生命体で死ぬことを知っているのは人間だけだ。かけがえのない素晴しきたった一度限りの「生」。存在の必要性の相互確認が形成されている集まりとして社会があると思う。そこからはユニバーサルデザインの考えが出てくる。この社会で阻害されている人たちに合わせてデザインされることだ。

綾部の駅を降りて驚いたのは歩道橋がないこと。かつて私は歩道橋ができる時に反対したことがある。高齢社会に歩道橋は無理。スウェーデンには公共施設にエレベーターとエスカレーターの設置義務がある。まちのどこへでもバギーカーで行けるようになっている。人間が住むまちはユニバーサルデザインでなくてはダメだ。

もう一つは、人間は「ある」存在ではなく、「なる」存在であるということ。人間は現在を否定し、未だない「素晴らしい存在」になろうとする存在である。



人間は人間に「なる」ために、人間と人間とが触れ合い、人間と自然との結びつきを作りながら、人間になっていく。たとえ明日、この世が終ろうとも、人間は明日のために生きなければならない。私はそういう人生観をもつ。

「大変の時代」を生きている

ジャーナリスト・筑紫哲也は著書『スローライフ』のなかで、「私たちは“大変”の時代を生きている。これは大きな変化が起きているという意味でも、社会や自然が変動し変になっているという意味でもある。幸せになるどころか、この“大変”に飲まれて多数の“怪我人”“犠牲者”が出るのではないかと危惧してスローライフの運動を始めた。1人1人がじっくり社会を見直すことから始めなくてはならない」「もっとも愚かで、忌まわしいのは、“勝ち組”と“負け組”ということ。単一の価値（ものさし）で測ること。大多数はそこでは敗者になってしまう。さまざまに多様なものさしがあることが、お金以上に、この社会を豊かにする」と語っている。



歴史の曲がり角でスピードを出したら倒れる。ゆっくりゆっくり間違えないようにというのが正しい。

人類は絶滅の危機、二人の友人を失う

人類が滅びるのは意外に早い。今世紀末には、人類は過去に経験したことがないほどの過酷な環境で生きることが余儀なくされているであろう。どのような状況になるかは、まさに現在の我々がとる態度次第である。と、著名な天文学者が語る。「絶滅の危機に瀕している時に、戦争をしている場合か」だ。企業がCO2をどのくらい出すかなどの調査があるが、戦争になるとどのくらいの破壊があるか。どっちの国がいいか悪いかと言っている場合ではない。

農業はすべてを生産してくれる。衣類も、住もできる。すべてをまかなうことが出来るが、スウェーデンの教科書では、このように警告している。「いま私たちは、人間と自然とをむさぼり食う“強盗文化”の時代に生きている。もし、この文化が向かっている目標を修正しないならば、惑星・地球とともにする私たちの旅は、耐えがたいものになることだろう。この銀河系の水色の惑星は、ホモサピエンス—知恵をもったヒト—にすばらしい生命を与えようとして創造されたものではなかったろうか」と。

自分自身の存在を意識できる生命である人間にとって、最も根源的な欲求は、孤独という恐怖から抜け出すことである。そのため人間は誕生とともに、自然と人間という二人の友人と、手をつなごうとする。人間は「自然環境」と、自然環境と調和した共同体的人間関係「社会環境」とに抱かれて「生」を営む。“強盗文化”によって自然との絆、人間同士の絆が断ち切られてしまう不安感は、伝統的な共同体への純粋な憧憬を呼び覚ます。そこから戦いも起きる。

「所有(having)欲求」から「存在(being)欲求」へ

私たちには二つの欲求がある。生きる目標を「豊かさ」から「幸福」へ転換する必要がある。生活水準の上昇から生活様式の充実を求めるようになった。「豊かさ」から「幸福」へということだ。「所有欲求」は自然を所有することによって充足される欲求、豊かさの実感ということ。「存在欲求」は人と人、人と自然との関係で充足される欲求、幸福の実感だ。工業社会は存在欲求を犠牲にして、所有欲求を充足したのに対して、ポスト工業社会、現在のような形のない知識や情報の社会では、人間の人的欲求である存在欲求の充足を目指すようになる。これから舵を切り替えなくてはダメだ。所有欲求を充足する工業社会では「蓄える」ことが美德であっても、知識を生産するポスト工業社会では「惜しみなく与え合う」という共同体的人間関係が培養する精神的風土が美德となる。

人が育ちたい 住みたい、地域社会を創造する

子ども達を育てたい社会ではなく、子ども達が育ちたいと思うまちになろう。つまり、存在欲求を充足する地域社会をつくることが大切だ。生活の「質」への要求、清らかな空気、澄んだ水、緑の空間、美しい公園、美術館、博物館、スポーツ施設などが重要になる。生活空間の質的充実、人間の創造活動の「場」としての生活空間、人間と人間が愛し合い、人間と人間が学び合う「場」、生活様式としての文化の形成だ。

工場などを設置すると人が集まってきたのは工業時代。これからは都市そのものが博物館・美術館・公園になっていく。生活機能が充実している、つまりここで生活したいと思うところに、ここに育ちたいというところに、生産機能が集まってくる。所有は満たされてしまうと、これ以上求めても仕方がない。

人間の触れ合う地域社会は、「蓄える」ことから「与える」ことが重要になる。交流の「場」と出会いの「場」が大切になる。道も人間の出会いの場となり、子どもたちの遊べる場となる。ポスト工業社会ではそういう生活機能が、生産機能の“磁場”となる。これまでの「量」の経済では生産機能が生活機能を引きつけたが、「質」の経済では生活機能が生産機能を引きつけることになる。「質」の経済では「ファウンテン(fountain)効果」が働く、大地から泉が吹き出すように、下から上へと幸福を積み上げる。憎しみと怒りを煽られ、生き残りをかけた競争原理には走らない。

人間を手段から目的とする社会へ、人間讃歌がこだまする社会へ

人間はいつ人口になったのか。人口 (population) という言葉は重商主義者が作り出した。人間を兵力とか労働力とみる。私たちは人口ではない。人間を没个性的な存在として把握する人口が、政策目的とされるときは、人間を「目的」とする社会ではなく、人間を「手段」とする社会が目指されるときである。人口では、かけがえのないたった一人の存在、大事な一人の命という風に考えない。『星の王子様』の話のなかでは、友達を作るのに、習慣を作らなくてはならないのに、人間は友達を市場で売っているものと思っているのでは、という言葉もある。

私たちが考える人間讃歌は

子どもたちのために2つの木陰が必要になる。それは緑の木陰と、人間と人間が作り出す絆の木陰だ。そして、自然と「生」を共にする快適な「自然環境」。人間と人間とが「生」を共にする幸福な「社会環境」を取り戻そう。そのときそこに、人間讃歌がこだまするはずだ。地域から幸福は噴き出してくるものだ。



(5) 分科会発表

時間：14：20～14：35



第1分科会 塩見直紀・野口智子

当分科会は「半農半X」の説明から始まった。現実の農業はかなり厳しい。高齢化などで。しかし、東京で味噌づくりをする人が居たり、発酵食品に興味がある方が居たり、世の中は変わってきている。リスペクトする人を求めて、人がやってくる不思議な時代だ。芸術を学ぶ大学院生の意見で「叔父からただく米は大事に思う」とあったが、そのパッケージなどをぜひデザインしてほしい。食や農の世界にアートを活かしてほしい。綾部は人材の宝庫だ。デザインや人材育成、リスペクトというキーワードが印象に残った。

第2分科会 齊藤 睦

日本全体の人口が減るが、人は数ではなく人材だ。住むところに、当事者意識が必要。小さな経済が循環しているところが豊か。水源の里の「栃餅」で数万円の収入がある、そういうことが豊かさだ。結果の出来不出来ではなく、経済規模でもなく、そのプロセスが丁寧にデザインできることが大事。綾部はそのホットスポットだ。再生エネルギーに着手している方から「バイオチップでエネルギーとか農業の動力に活かしてはどうか」、また「当事者意識が育たず悩んでいる地域間で交流する仕組みがあった方がいい」などの話が出た。今回、

人と人の触れあいがあった分、人間の質が上がった気がした。

第3分科会 筒井一伸・坪井ゆづる

2,000年以降に生まれた人たちを受け入れられるのか？人口減少など今の若い人には関係ない。年齢差のギャップをどう埋めていくのか。コミュニケーションのとり方が大きく変わってきている。SNSで付き合っている人が多い。対面で会うのとはまた違う。『となりのしかたさん』という本に感心した。これはひとつのコミュニケーションのツールになっている。会場の参加者の話が、軽やかに生きている体験談が面白かった。最後に、「半農半X」ではなく、「半官半X」という提案があり、それに賛同した。

(6) パネルディスカッション

時間：14:35から16:00



登壇者：

コーディネーター 増田寛也（スローライフ学会会長、日本郵政社長）

パネリスト

西脇隆俊（京都府知事）

山崎善也（綾部市市長）

中村桂子（JT生命誌研究館名誉館長）

小田切徳美（明治大学教授）

神野直彦（東京大学名誉教授）

※発言抜粋

<増田>

「あらためてスローライフを」考えたい。今日、まさに広島にはウクライナ大統領が来ている。戦争が起きている時代だ、コロナなどの感染症を、人類の知恵でコントロールできるのかなども心配しなくてはならない。一方、技術革新が年々進んでいる、本来、人類を幸福にするために行われてきたが、テクノロジーの進化は格差を広げる方に向けて行くこともある。ChatGPTなどが出てくると規制のルール作りも必要になる。今、あらためて、



こういうことに対しての危機意識を持ち、スローライフということの意味を深めることが大事。それはよりよい社会に繋がると思う。そのため今回、このタイトルがついた。ここスローライフ先進地、綾部でそれを考えたい。

「水源の里」は、上流は下流を思い、下流は上流を思う流域連携の話だ。私が岩手県知事時代に「森は海の恋人」という考えでお隣の県から植樹に来た。牡蠣漁師の方々が植樹する、緑がきれいだと海もきれいになるという考えだ。大きな循環のなかでは行政の区分は小さなことだ。綾部は「水源の里」が全国に広がった発火点、3つの分科会のテーマを深掘りする場としてここで議論したい。

私が知事時代、行政側が皆に、がんばろう汗を流そう、ということが、東京に出ていくことに繋がったという反省がある。途中から「がんばらない宣言」などとした。過疎で何も無いところから出ていくのではなく、多様な生き方を考えてもらうことが大事だろう。人口増の時はひとりの人に、ひとつの仕事を集めてやる時代だったが、これからはひとりが「兼ねる」という時代に切り替わっていくだろう。小さいということは「丁寧」ということに繋がるが、我々は民主主義を最高理念として、そういう名のもとに、大きな声が主流になっていきがちだ。小さな声をどう拾っていくのが大事だと思う。こういう奥深い問題は、綾部に来て気づかされるのだと思う。昔「大きいことはいいことだ」という流れがあったが、大きく切り替えることの難しさを感じる。そんなことは若い人はもう分かっている、分からないのは私も含む上の世代の人だ。世代間の関係、若い人の多様化している意識を共有化していくことが大事だろう。

また、デジタルの力をかりて、地方を豊かにしていく、盛り上げていくこともこれからは大事だろう。随所に温かさを感じる綾部だった。綾部の本質を続けていながらも環境変化に対して、同じことばかりを続けるのではなく、時代の先を見すえながら変えるところは変えていくことが必要だ。 筑紫哲也さんが言っていたのは“緩急自在”。この自在さこそがスローライフだと思う。



<知事>

中丹地域は、綾部市・福知山市・舞鶴市の3市で構成されている。一部「森の京都」と「海の京都」が重なっているところがある。「もうひとつの京都」は、京都市以外にも魅力があるということで取り組んできたものと思うが、私が知事に就任後、この概念を観光振興だけに留めず、地域活性化にも資するものにすべきと考え、観光振興と地域のブランディングに取り組んできた。去年の12月には、京都府の新しい



総合計画を策定したが、全体のコンセプトは「あたたかい京都づくり」とした。「あたたかい」とはまさにスローライフのテーマだ。人と人の触れ合いとか絆を大切にということだ。また、総合計画では、広域連携プロジェクトを実施しているが、生活や産業に行政の境は関係ない。中丹地域全体で地域活性化を考えていきたい。

基調講演で「子どもを育てる2つの木陰」のひとつが緑の木陰という話があった。人間は緑が貯めたエネルギーで生きているという話もあった。古代から

緑と人間生活の結びつきがある。綾部はあたたかい豊かな森林に囲まれた地域として発展してきた、ということから「水源の里」や「半農半X」の考えも出てきたのだろう。それをあらためてこれからのものにしていきたい。

一方、綾部は縦の京都縦貫自動車道と、横の舞鶴若狭道の結節点だ。産業立地も盛んだ。ただ働く方にとっても綾部の生活・暮らしはどうなっているのかなど暮らしの関心も高い。経済活動、産業活動といえども、暮らしとの結びつきがないと企業がなかなか来ない。コロナにより、オンライン活用などで、毎日通勤しなくてもいいということになり、田園回帰の流れができた。以前、綾部で移住した方々と座談会をしたが、異口同音に綾部の素晴らしさを語る。そういうポテンシャルをどう生かして、活性化、スローライフに繋げていくのかということで我々も努力してまいりたい。綾部はもともと移住の先進地であるが、京都府でも移住条例を全面的に改正した。地域のためだけではなく、どうすれば移住される方のひとりひとりの生活、暮らしの豊かさに繋がられるかを考えたい。

観光について。「もうひとつの京都」はいわゆる周遊・分散型で、京都市だけではないと発信してきたが、いま交流と持続性をキーワードに観光総合戦略の見直しを進めている。一日だけ来てインスタをとって帰る方、二地域居住や長期滞在の方などいろんな形の交流が、移住定住に繋がっていく。地域の方がそれぞれの段階に応じて、受け入れてくださるといい。これからは観光の概念を大きくとらえ、地域の活性化も含めて考えなくてはいけない。綾部は「水源の里」という活動と、交通の結節点としての場とで、ハイブリッドになっている。他の市町村でも、真似るというわけでないが、自信を持ち、地域の良さを磨き上げながら、移住につながっていくという環境を整えることが重要だ。

「半官半X」の話が出たが、地方公共団体の職員は既にもともと集落に入って、地域経営に関わっている。官の立場でも、机に座っているのではなく、もっと現場に出て、幅広く地域のために尽くしてもらおうと思う。綾部は意識の高いところ、ここでいろいろな取り組みが生まれていることを誇りに思う。



<市長>

この町で生まれ育った。いいところだが構造的に人口が減り、少子高齢化、過疎化が進んでいる。「自然動態」、つまり赤ちゃんと亡くなる人との差し引きは、綾部市では年に約 200 人が生まれ、約 500 人が亡くなる。その差が 300 人。3 万人の都市で、100 年後にはゼロになる。「社会動態」では毎年、高校を卒業すると 3~400 人が出ていく。高校生の 2 割は残るが 8 割は出ていく。そのうち 3 割は戻るが、5 割は戻ってこない。以前、藻谷浩介さん（地域エコノミスト）に綾部市全体を健康診断のように見てもらい意見をいただいた。「高校生の 2 割が残るのなら、それをまず 3 割に増やす、3 割戻る人を 4 割にする。社会動態を増やすことだ」といわれた。そこで、移住定住を重要施策とした。



定住交流部を設け、定住促進条例を制定した。これは自治体にしては珍しい。移住は、その人の人生全てを受け入れること。公務員は自分の専門業務だけに取り組みがちであるため、それぞれに横串を刺して一貫して取り組むようにしたのが定住交流部。「定住交流部が最後は面倒を見てくれる」という人間関係で移住を決められる。こうして移住者が増えた。ただ、住みたい人は多いが、1,000 人が空き家を借りたいといっても、空き家は 1000 軒あっても、100 軒しか貸せない。900 軒はさまざまな理由で無理。移住したい人はたくさんいるが、空き家の供給側に問題がある。しかし、令和 4 年度は社会動態が 29 人のプラスになった。企業誘致が進み、外国の人も増え、田園回帰も進んでいる。今までの政策は間違っていなかったと思う。

金融業界に長く携わったせいか、いつも数字を意識してきた。今、反省を含めていえば、移住する人の数ではなく、どういう人が、なぜ綾部市に、ということが大事と気づいた。また、つい結果を求めてしまう。山登りに例えれば、登る間は苦しくて当然で、山頂の景色を楽しみにしていると思うが、違う。登る過程を楽しむのが本当のところだ。綾部に関わるある芸能人が、クラウドファンディングで資金を集め、皆で少しずつ古民家を改修している。すぐ「どうするのか？」などと私は聞いてしまうが、その人はその「プロセスを楽しんでいる」と言う。私には目からうろこだった。時間をかけてやっているのは「将来への投資と考えるように」と小田切先生もおっしゃった。「水源の里」も同じだ。前の協議会の会長が、「80 歳を過ぎた今が一番幸せだ」とおっしゃったこと

がある。皆でワイワイやる方がいい。「水源の里」にお礼の手紙などが来ると、それが活力になる。さらに小さな経済が動く嬉しい。市の総合計画で「一人ひとりの幸せをみんなで紡いで実現できるまち・・・綾部」を将来都市像としている。規模を求めても仕方がない。隣の人の息遣いまでわかるようなまちであればよい。世代交代については、ワイワイできるそんな場を提供できればいいと思っている。

移住政策を頑張っているが「近き者悦ばば、遠き者来る」が正解だ。市民がまず住みやすいまちにすることだと思う。



<小田切>

キーワードは2つ。ひとつは「にぎやかな過疎」。人口は減少していても、何かそこはかたなくワイワイガヤガヤしていることが大事だ。定量化は難しいが、そういう地域に最近出会っている。移住、関係人口を集めているところがある。そのようにいま、農山村にも格差が出ている。そのひとつに「にぎやかな過疎」がある。人が人を呼ぶ、仕事は仕事を増やす。商工会の会員が増えているところもある。当然メインプレイヤーは地域の方々、コミュニティだが、企業、大学、NPOなど“ごちゃ混ぜ”になっている地域が生まれている。綾部の一部はその、にぎやかな過疎になっていると思う。



2つ目は「半農半X」。ここでは塩見直紀さん（半農半Xの発案者）「半農半X」への聖地巡礼があるのではないかと思います。塩見さんの場合は文明論的評価、奥深いもの。もう少し実践的にいうと、移住者はなぜそこに来るのかというと、そこに「仕事がある」から。むしろ仕事を作り出して「起業」す

る。または「継業」これは第3分科会の筒井先生が作り出した言葉だが、従来の仕事を継ぐ。またサテライトオフィスの様に外から仕事を持ち込んで「移業」する。それらを組み合わせて「多業」で暮らすことも。農山村では人手不足でいろいろ仕事がある。ひとつひとつの仕事はこれまでの一人前は難しい。それで、今までは仕事がないと言ってきた。しかし、0.3のものを4つ集めれば1を超す。綾部のある移住者の方は、農家民泊を中心にしながら新聞配達、外国人ガイドなど、7つの仕事をやっている。新聞配達は情報収集にもなる。仕事ひとつひとつがシナジー効果を持っている。「半農半X」は「多業」のなかのひとつまだ。移住して農業に全く無関係ということはない、自ずから「半農半X」になる。これらの方々を農業の担い手として位置づけ、農業施策のなかにもしっかりと位置づけるべきだと思う。

内外の“ごちゃ混ぜ”をどう作るのが大事だが、まず、内部で“ごちゃ混ぜ”をつくらないと、外との交流はできない。それが課題、気をつけたいことだ。農山村で三世代が一緒になれるのが「公民館」の特徴だ。若い娘さんとおじいちゃんが共に話せる。「公民館」を活かすといい、それが場になる。

農業への新規参入には、技術、土地、コミュニティ、資金が必要。だが、ずいぶん変わってきている。徐々にいろいろハードルが下がってきている。今後は、資金面で小さな農業へのサポートが必要と思う。

課題地域、価値地域、隔絶地域の3つの状況が移り変わって今があるが、「水源の里」はまさに、都市と農村の隔絶を解消したものだと思う。



<中村>

綾部では、東京の電車のなかで毎日会っている人達とは全く違う「顔」に出会った。なかから人間性が染み出してくるような。たぶん「水源の里」の活動が皆さんに人間としての自信を育てているのだろう。「水源の里」というキャッチフレーズは見事な言葉だ。水は人間の一番大事なもの、流れがあって、広がりがある。スローライフの人間としていえば、「人間は生きもの」だというのが私の原点だ。スローは、生きものに合わせて生きること。都会ではそれができない、人間にあわせて生きられない、追い立てられているから。



今回の分科会の3つのテーマは、すべてスローライフに繋がる。例えば「小さい」ということは大事、丁寧にできるということだ。人間の脳は、10人ぐらいはパッと反射的に繋がることできる。野球やサッカーなどそうだ。お互いが分かり合ってサッとできる。それだと足りない、もう少しとなると、30人くらいまでは話し合える。それより多いと150人が、脳の付き合える範囲だ。これ以上になると、本当の繋がりにはなかなか難しくなる。この位でいい、こういう場所がいい。小さいと言わずに「ちょうどいい」大きさ、というといい。人間らしい大きさと考えればいいと思う。

もう一つはプロセスを楽しむこと。いい顔をされているのはプロセスを楽しんでいるから。「タイパ」(タイムパフォーマンス)というのが流行って、短ければ短い方がいい、結果が出ればいいということになりがち。都会では手をかけることは悪いことになる。昨日「綾部バラ園」に行ったが、ボランティアの方がとても楽しそうだった。バラを育てる、手をかけることを楽しんでおいでだった。過程を大事にすることは、豊かなことだ。手をかけることを楽しもう。子どもだったり、緑だったり、手をかけないとダメだ。バラ園を見て、綾部にはそういうベースがあると思った。これからの日本社会に大事なことだ。

繋がりというが、やはり今の社会で問題なのは、違う世代のふれあい。価値観が違ってきているので、いま大事なのは、違う世代どうしの繋がりやふれあいがあが出てこない。「それは違うね」と言ったら終わり、移住などの問題も解決できない。親が「都会で頑張ってこい」などと言っている間はダメだ。今、そういうことが大事だと思う。

『驚きの地方創生「限界集落が超☆元気になった理由」』を読んで驚いた。市
民憲章で「平和を願い、祈りのあるまちにしよう」と、「水源の里と中東和平プ
ロジェクトは繋がる」とある。こういうことを綾部でやっていることはすごい。
戦争は人間が起こさなければ起こらない。哲学者カントが『永遠平和のために』
という本を書いているが、人間ほどかけがえのないものはないと言っている。



<神野>

綾部はまち全体がユニバーサルになっ
ているように思えた。日本では欠陥を見
つけて嘆くことが多い。先進的に貢献す
る意味でも、綾部が築き上げてきた良い
ことをもっと伸ばすのが重要だ。移住を
うまく進めているからいいが、移住でう
まくいかない場合、その土地のコミュニ
ティが開いてくれなかったということ
をよく聞く。移住者を外に置くことがあ
る、それが上手くいかないと、と思う。
そういう関係がここでは上手くできている
のだと思った。



私は「ほどほど」がいいと思う。国の「五全総」のまとめのときに「ほどよ
いまちがつくるいくつもの日本」という報告を出した。その中で生活機能が完
結できる町がいい。祈りは現代人が忘れていて、大切だと思う。

筑紫哲也がいつも考えていたのは「それで人間が幸せになりますか」という
問いだ。それを大切にしたい。



(7) 感謝のことば

川島正英 (NPO スローライフ・ジャパン理事長)



<川島>

これまでのフォーラムと違うのは「あらためて」が強調されたこと。スローライフ運動は20年前に、筑紫哲也、瀧栄治郎と私で始めた経緯がある。今日は、あらためて、皆さんとスローライフを学んだ気持ちになった。ありがとうございました。



4 先進地、綾部であらためて学んだ

スローライフという大きな概念を、あらためてどうとらえ直すか。今回、皆で考えることが出来た。20年間のスローライフ運動のひとつの締めくくりとしてのフォーラム開催地に、まさに綾部市はふさわしい先進の場であった。分科会のテーマである、「食と農を大切に」「小さい力を活かす」「多様に生きる」この3つが、とりもなおさず、「スローライフ」を表現してくれていた。

スローライフ・ジャパンでは、「スローライフ・フォーラム in 綾部」の開催以外に、毎週3,500人に配信するメルマガ「スローライフ瓦版」で、綾部に関する記事を、12週にわたり掲載。12品の綾部市特産物を紹介してきた。そして月に1回の勉強会「さんか・さろん」では、4月、山崎善也市長にお話しただき綾部の予習をし、6月、「スローライフ・フォーラム in 綾部」報告として、スタッフ2名がスピーチ、綾部市担当者も参加いただいたの復習となった。2回の「さろん」に、のべ76名が参加した。

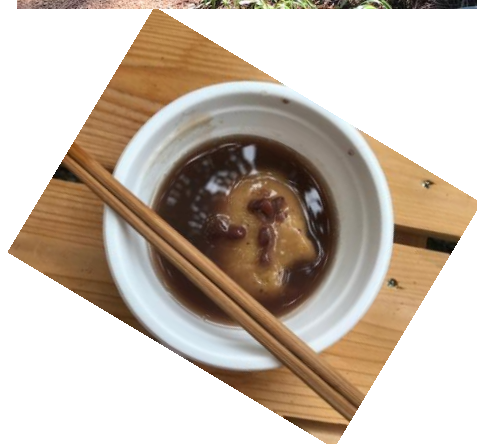
報告の「さろん」では、「あの、老富の森の澄んだ空気が忘れられない」「たくさんさんの知り合いができた」「“栃餅ぜんざい”を作ってくださった女性たちの笑顔が素晴らしかった」「小さいことを丁寧に、ということを綾部で知った」「今度はゆっくり、綾部に行きたい」などの感想が出た。

ミツマタの咲く早春から、「鹿の被害があり、5月末にシャガが咲くかどうか」と地元でご心配いただいたが、フォーラム事前のミーティングで増田寛也スローライフ学会会長から、「鹿には鹿の事情がある。花がないなりに学ぶことはある」との発言があった。例年より花の少ない“シャガの群生”は、参加者に忘れられない場となった。

地元の皆様の心遣いと、濃い話し合い交流、そして豊かな自然が、訪れた皆をとびきりの笑顔にしてくれた。たくさんさんのことも学んだ。お迎えいただいた地元の多様な皆様、各地からの参加者、細やかに配慮いただいた綾部市職員の皆様へ、心より感謝申し上げたい。

そして、綾部開催の道筋をつけてくださった、故・瀧栄治郎様（日本テレネット株式会社）にフォーラム成功をご報告申し上げます。

スローライフ・ジャパン/スローライフ学会



.....
NPOスローライフ・ジャパン
〒160-0011 東京都新宿区若葉1の6の1
電話 03-6685-3979
E-Mail/ slowlifej@nifty.com
2023年6月